



三輪田めぐみ、約1年9ヶ月振り二度目のステップス個展である。初回、三輪田は大学院入試の結果待ちをしながら個展を行った。今回、大学院での制作の成果がよく表れている。それは三輪田個人の成長でもある。

三輪田は今回、大小合わせて9点のキャンバス/油彩画を、画廊内、入り口、事務所にほどよく展示した。三輪田の今回の主題は「隠す」ことにあると感じられる。シーツに手を入れて手が見えない。

しかし「隠す」ことによってシーツの布の撓みをデッサンのように描いていないし、見えないことの不可思議さを幻想的に描こうとしているわけでもない。シュルレアリスムよりもむしろ、中世の絵画を思い起こさせる。

それでもそこに寓意は秘められていない。油彩画が持つ独特の雰囲気咀嚼して、三輪田独自の世界の形成に試行錯誤している最中なのであろう。三輪田の作品は極めて日本人らしくなく、西洋でも見ることはないだろう。

シーツに包まれた掌は、永遠に見ることができない。それはM・デュシャン《秘められた音に》(1917)が頭に浮かぶ。振れば音が出るが、何が入っているのか分からない。三輪田の作品の場合、隠された掌を想起することが問題なのではなく、見えていると思われている物が、実は全く「見えていない」ことを問題にしたいのではないだろうかと思いは感じる。

一点遠近法の画面に慄然と並ぶ物体は何か、顔と足を描かず腕だけがテーブルの上で移動している光景は何をしているのか。そこに描かれているものが、本当に具体的であることに疑問を感じるのである。

すると「具体」とは何かという疑問が湧いてくる。花を描けばその花なのか、美しさだけを抽出するのか。



三輪田の場合、描かれている物質と全く異なるものが内に秘められているように思えてならない。そしてそこには寓意はなく、剥き出しの三輪田そのものが存在する。

